

**戦略的国際科学技術協力推進事業日本－フランス(CNRS)研究交流
平成 22 年度終了課題事後評価報告書**

1. 研究課題名:「超臨場 VR 体験環境」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者: 東京大学大学院情報理工学系研究科 教授 廣瀬 通孝

2-2. フランス側研究代表者: LSIIT, UMR 7005 CNRS-ULP 教授 Dominique BECHMANN

3. 総合評価:(優)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

本研究交流プロジェクトは、バーチャルリアリティに関する日仏の協力関係に実績のあるチーム構成で、先行プロジェクトの成果を踏まえて、より高度な超臨場 VR 環境を実現することを目指して、研究提案書に記載された3つの研究項目とその分担に従って実施されたもので、それぞれの項目に関して一定の貢献があったものと認められる。多くの共同ワークショップ、セッションが開かれたことや、仏側研究者の日本への長期滞在があったことなどの交流が、研究開発に良い相乗効果をもたらしたものと考えられる。

一方で、システムの実装と評価を行う研究であるために困難があることは理解できるが、多くの研究者が関わった割には公表された査読つき論文数がやや少ない印象がある。3年間の期間があったにも関わらず、「共同研究を開始した」ということが成果として記載されるようでは寂しい。また、逆に多くの組織と多くのメンバーが関わったためか、成果内容に統一性が感じられず、具体的な成果内容があまり明確ではない。それぞれの技術項目に関して一定の成果が上がっていることは想像できるが、この研究そのものがどのような社会的波及効果を有しているかについては、研究終了報告書の記述がやや弱く、はっきりしない。

(2)交流成果の評価について

教員のみならず研究に参画する大学院生も相手国に派遣されており、本事業の趣旨をよく理解して相互の研究機関への人的交流や人材育成が幅広く積極的に行われた。海外から日本への派遣については、2名の研究者による約1カ月の長期滞在による共同研究が行われており、本事業を活用して具体的な研究を密に行ったという点で評価できる。また、セミナーやオーガナイズドセッションを積極的に開催し、本事業でカバーする研究分野の学術交流が積極的に行われたことがうかがわれる。このプロジェクトを通して、プロジェクトに参加した組織間だけではなく、日仏のバーチャルリアリティ学会も深い関係が構築されている。その結果、

プロジェクト終了後も交流が持続していく体制が築かれたと評価できる。

相互的効果の観点からは、日本からフランスへもう少し長期に滞在するメンバーがいても良かったと思われる。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

共同研究者として掲げられているメンバーによる共同研究体制にはしっかりしたものがうかがわれ、本事業を通じて積極的な研究活動と交流が行われたことは評価できる。多くのメンバーが参加した割には公表論文数がやや少ない感じもするが、一方で、本事業の趣旨をよく理解して学会におけるオーガナイズドセッションの企画やセミナーの開催による学術交流を通じた成果の発表や交流が行われたことがうかがわれる。研究終了後も 2011 年 10 月の東大フォーラムへの共同参加などが企画され、今後の展開が期待できる。